



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

3 月例会 (3 月 23 日開催) 報告

「使徒言行録の学び」(第 14 回) 堀川 樹 伝道師

—新約聖書 使徒言行録 第 14 章—

右写真は中央：日高会長、左：中川副会長、右：寺嶋副会長



今年度最初の「信友会報」をお届けします。「信友会報」は基本的に例会のあった翌月に、例会時の講演記録や役員会報告、会員のコラムなどをまとめて編集していますが、それに加えて今月より「例会案内」をリニューアルした「**PELICQN NEWS**」を毎月月初めにお届けする計画です。

二つの情報ツールを使い、信友会の活動とその取組みを会員の皆様に細かくお伝えする事で、信友会の活性化および例会への関心を高めて行きたいと願っております。

この 4 月には地の塩会からの移籍会員もあり、また今年は、5 年に一度の全体修養会が開催される年でもあります。阿佐ヶ谷教会唯一の「男性だけの集まり」である信友会の役割が問われる年と言えるかも知れません。これまで例会への参加に躊躇されていた会員の皆様が一人でも多く例会に足を向けて頂き、会員同士の活気ある交わりの会作りを模索して行きたいと考えます。

会員の皆様の活発なご意見、ご提案など頂ければ幸いです。 (信友会会長 日高好男)

「聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—」第 14 章 堀川 樹 伝道師

使徒言行録 13 章から始まったパウロとバルナバによる宣教旅行、の続きの箇所です。アンティオキアから逃れたパウロとバルナバはイコニオンでも、その会堂を中心にして福音を語ったことを伝えます。

イコニオンにて

イコニオンのユダヤ教の会堂で福音を語った結果、「大勢のユダヤ人やギリシャ人が信仰に入った」(1 節)。この大勢とはどれくらいの人数なのかはわかりませんが、彼らの話を聞き、新しくキリスト者となった人々がいたことは疑いありません。しかし一方で彼らに反対するユダヤ人も多く、「信じようとしないうダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を抱かせた」(2 節)とあります。「兄弟たち」とあるのは、反対者たちの悪意が、単にパウロとバルナバに向けられたものであったというだけでなく、新しくキリスト者となった者たちへの悪意であったことを意味します。その結果、町が二つに分裂したという 4 節へと繋がり、「二人に乱暴を働き、石を投げつける」(5 節)ほどの激しい行為が記されています。こういう衝突や分裂騒ぎの中で、パウロとバルナバは、自分たちの勇気や信仰心や熱意ではなく、ただ「主を頼みとしてあり続けた」(3 節)。彼らはキリストへの祈りをもって、あらゆることをキリストに委ねつつ行いましたのです。

(次ページへ)

2014 年				2015 年			
4 月	5 月	7 月	9 月	11 月	1 月	2 月	3 月
27 日	25 日	27 日	14 日	23 日	10 日	25 日	22 日
		(夏の交わり会)		(新年の交わり会)		(信友会総会)	

信友会例会の今年度の開催予定です。予定に書き入れてぜひご出席下さい。



(前ページより)

このことは、使徒言行録全体を通して語られていることで、人間的な思いで起こる分裂や争いの中で、そうした人間的な思いを捨ててキリストに委ねていくキリスト教信者の姿が明瞭に記されています。福音宣教の主体は常にキリスト。私たちはもっと徹底してキリストにより頼んでいく大切さを教えられます。

しかし、イコニオンでの分裂騒ぎは止まず、パウロとバルナバはこの争いを避けて、リストラとデルベへと向かいます。二人は、「信じようとしぬユダヤ人や扇動された異邦人、指導者たち」(6節)と対立し、対決したのではなく、争わず、「難を避け」(6節)、次の町に向かうこととなるのです。



足の不自由な人への奇跡 人間を神格化する誤解

イコニオンを逃れてきたパウロとバルナバは、この町でも福音を語ります。その場所がユダヤ教の会堂、あるいは町の通りのような他の場所だったのかも聖書は語りません。いきなり、この町に住む「生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった」(8節)人が、パウロの話を座って聞いていたという出来事から始まります。おそらく、イコニオンで触れられた「主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされた」(3節)ことの内容として、リストラでのこの人の癒しの出来事を記したのでしょう。またパウロとバルナバが「使徒」として神から特別の力を与えられていたことを示し、他の使徒たちと同じような働きをする者であったことを明瞭にするものでもありました。



9節では「足の不自由な男」をパウロが「見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め」た、とあります。この人は、パウロと問答したわけでも、キリストの教えを学んだわけでもないのに、なぜいやされたのでしょうか。それはおそらくこの人はパウロの話を熱心に聞き、それを肯定的に受け入れたからです。もちろん、彼の信じる心は神だけが御存じのことですが、熱心に耳を傾けて聞くことこそが「ふさわしい信仰」と言えるでしょう。この癒しの出来事がやがて大きな展開を生んでいきます。



11節以下ではパウロが行った癒しによって、町の人々の間で人間を神格化する誤解が生まれたというのです。何か特別なことができる人を神格化する傾向は、当時でも一般に広くありました。神々の降臨は起こり得ることとされていましたし、そうしたことは、使徒たちのキリスト教の宣教においても各地で起こったことでしょう。この事態に対して、パウロとバルナバが激しく「否」を唱えたことが記されていきます。「服を裂いて群衆の中に飛び込んで行き、叫んだ」(14節)というのは、神々への神格化に対する激しい否を伝える表現です。「服を裂く」というのは、悲しみと怒りの表現ですし、「群衆の中に飛び込んで行き」は、二人が群衆と同じ人間であることを主張する行為でもあります。



15-17節は、この事態に対する二人の言葉として記されていますが、まず、自分たちが他の人々と同じような人間であり、他の人たちが本来の神に立ち返るように福音を知らせているものにすぎないことが強調されます。そして、その本来の神が、天地の創造者であり、その神が雨を降らせ、食物を宥らせ与えられている神であることが述べられます。そして、二人が群衆の中に飛び込んで、



「自分たちもあなたがたと同じような人間である」と叫んだということは、その同じ人間が本来の神を知り、これを信じることによってもたらされる恵みを人々に示した、ということでもあるでしょう。彼らは「神となった人間」ではなく、「人間となった神」＝イエス・キリストを示そうとし、それによってもたらされる恵みを強調したのです。人間ではなく、ただ神だけが礼拝されるべきことであることを明言します。

しかし、やっぱりここでも彼らの活動がうまくいったわけではありませんでした。19 節以下で、ビシディア州のアンティオキアやイコニオンで彼らに敵対したユダヤ人たちがこの町までやって来て、「群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけ、殺そうとしたとあります。パウロはここで「死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した」と言われるほどのかなりの重傷を負ったようです。その後、町の外に引きずり出されたパウロを「弟子たちが囲いを取り囲んだ」（20 節）とありますから、その町で新しくキリスト者たちとなった人々をまとめて、引きずり出されるパウロの後を追ったのかもしれませんが。「弟子たちがパウロの囲いを取り囲んだ」のは、傷ついたパウロを真ん中にして祈るためでした。パウロは、その祈りの中で回復し、「起き上がって町に入って行き」ます。

こうして、ここでも迫害されても迫害されても、福音が語られ、新しいキリスト者が与えられたことが記されていくのです。そして、この迫害におけるパウロたちの苦難が決して無駄では終わらなかったことを伝えているのです。

迫害と苦難の中でも神の恵みを委ねられている

リストラを出たパウロとバルナバは、そこからさらに東のデルベへと向かいます。このデルベという町でも新しくキリスト者となった人々がいたことを 21 節で伝えます。

パウロとバルナバは、これまで自分たちを迫害し、追い出し、時には石を投げて殺そうとまでした町々へと戻り、そこで新しくキリスト者となった人々を「力づけ、『わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない』と言って、信仰に踏みとどまるように励ました」（22 節）と記します。これは、おそらく、著者ルカによるパウロの第一回宣教旅行についてのまとめとも言える言葉でしょう。

アジア州のこれらの町々での迫害と苦難が自分たちの信仰をさらに深めて確信させるものであったと受け止めていただろうと思います。これらの町々へ戻ることは、もちろん、彼らを送り出したアンティオキアの教会へ戻るための当時の旅程に従ったものです。しかし、それらの町々で新しくキリスト者となった人々を励まし、キリスト教会として整えていく目的がありました。

23 節の「彼らをその信じる主に任せた」と言う言葉は、教会を自分たちの意志でどうにかできるものではなく、「主の教会」として、その歩みを主に委ねていくという姿勢を示しています。人間の知恵は神の目には愚かに見えることもありますから、教会の歩みを主に委ねることはきわめて大事なことです。

やがて彼らが送り出されたアンティオキアの教会に戻るわけです。「神の恵みに委ねられて送りだされた所」（26 節）この表現の中には、パウロとバルナバのアジア州への伝道活動が、迫害と苦難の連続ではあったが、「神の恵みに委ねられた」ものであることが明言されています。そして、「神は、異邦人に信仰の門を開いてくださった」（27 節）と続いているのです。

このように、①パウロとバルナバが町に行つてのユダヤ教の会堂で福音を語る。②その結果、イエス・キリストを信じる人も出てくるが、反対者も多く、迫害を受ける。③そして反対者たちの迫害の中でも、彼らは大胆に福音を語り続ける。④しかし、反対者たちの迫害は増し、彼らはいよいよその町を去る。というパウロとバルナバの伝道旅行の一連の流れが記されています。これらの働きは全て主に支えられたものであり、その迫害と苦難の中で異邦人への信仰の道も開かれていったのです。

（堀川伝道師による原稿）

信友会 2013 年度 第 9 回 例会・役員会記録

日 時：2014 年 3 月 20 日 12：30 ～ 14：30

場 所：ホール（例会出席 28 名、堀川先生含む）

1. 3 月例会：2013 年度の活動報告と会計報告および正副会長の選出をした。

- (1) 堀川樹先生に使徒言行録 14 章の聖書講解をしていただいた。
- (2) 会員消息：2013 年度逝去者 11 名。3 月誕生月を迎えた会員を祝った。
- (3) 地の塩会より佐藤望兄が移籍した事が報告され、歓迎する。
- (4) 3 月 30 日の音楽集会に向けて男声四部合唱の練習をした。（2013 年教会標語の歌）

2. 3 月役員会

- (1) 3 月 30 日音楽集会終了後 15 時～ 18 時、祈禱室にて新旧役員会実施。（出席 11 名、大村先生含む）
- (2) 新役員 日高好男（会長）、寺嶋章（副会長）、中川義幸（副会長）、打方真樹、江口三雄、小野淳二、北篤志（新）、杉野誠一、玉澤武之、藤本元明（新）、松田俊彦（以上 11 名）
役員の各分担を決めた。
- (3) 例会開催日を決定した。 4/27, 5/25, 7/27, 9/14, 11/23, 1/10, 1/25, 2/22, 3/22 の計 9 回。
聖研は 7 月、1 月（10 日）の会員交わりの会と 2 月総会を除く計 6 回で使徒言行録を続行。
- (4) 毎月第 1 週に PELICAN NEWS（例会予告など）を発行する。信友会報は第 3 週に発行。
- (5) 2013 年度の会計報告が承認された。（注：下段に掲載）
- (7) 直接連絡が出来るよう教会用とは別に会員のメールアドレスを登録してもらうよう広報する。
- (8) 役員選挙の方式は 7 月を目途に検討を重ねる。
- (9) 2014 年 3 月末現在の信友会員は 144 名。 以 上

（記録：荻原雄二、玉澤武之、会計報告：杉野誠一、写真：小笠原敦久、会報レイアウト：小野淳二）